

大先達－富士講指導者 齊藤義次のあゆみ－ 展示目録

会期：令和 7（2025）年 6 月 21 日～9 月 22 日

齊藤義次氏は神奈川県横須賀市長沢出身で、昭和 5（1930）年生まれです。初めて富士山に登ったのは 17 歳のときで、23 歳で長沢を拠点とする富士講「丸伊講」の先達（リーダー）となり、富士登山 45 回、御中道（富士山の中腹を巡る修行）3 回を成就するとともに、毎年三浦富士の山開きで富士講を代表する儀式「お焚上げ」を行ってきました。そして、令和 6（2024）年に 94 歳で亡くなるまで、生涯をかけて富士山を信仰し、富士講文化を後進へ伝授してきました。

齊藤義次氏は、毎年吉田口を訪れ富士登山をするとともに、本市では途絶えてしまった「お焚上げ」を、胎内祭（4/29）・大塚丘お境祭り（7/1）・吉田の火祭（8/26）で執り行うなど、多くの人々が富士講の伝統文化に触れる機会をつくってきました。また、平成 25（2013）年の世界文化遺産「富士山－信仰の対象と芸術の源泉」誕生に多大な貢献をしました。これらの功績により齊藤義次氏は、平成 27（2015）年の富士吉田市制施行 64 周年記念式典において、本市から表彰されています。

本展では、特に優れた富士講のリーダーを意味する「大先達」として知られた齊藤義次氏の生涯をたどり、富士講の伝統文化を紹介します。

1 富士山御師のしごと①

齊藤先達は、神奈川県横須賀市長沢で、父次郎吉と母ヨシの三男三女の長男として昭和 5（1930）年 12 月 4 日に生まれました。義次の名は父の「次」と母の「ヨシ（義）」の字を取って名付けられました。齊藤家の屋号は「馬力屋」で、父は馬で荷を運ぶ運送屋を営むとともに、長沢の台^{だい}の富士講「丸伊十七夜講」の脇先達（副先達）も務めていました。

昭和 25（1950）年 2 月 2 日に齊藤先達は山仕事で開放性骨折という重傷を負い、10 ヶ月も入院しました。この時、丸伊十七夜講先達で名付け親の齊藤靖一^{せいいち}氏に「先達を継げば助けてやる」と言われます。先達になる決心をした齊藤先達は、靖一氏の下で修行を積みます。齊藤先達は三浦の三大先達である西脇嘉平氏の所へも修行に通いました。齊藤先達は西脇氏に次のように言われました。「おい。すぐな先達って言ってな許すことはできないんだよ。それには 2、3 年かかるよ。あなたの平素の行いによって先達にしていいかどうか決まるんだよ。それを考えて物事をしなさいよ」。

修行は、大晦日から 1 月 3 日まで、午前 2 時～2 時半に水を浴びる水行をしてから三浦富士に登ることを 3 年間続ける厳しいものでした。そして、齊藤先達は昭和 28（1953）年に丸伊十七夜講の六代目先達になります。

齊藤先達は先達の役割について「みんなから慕われるようにならなくてはいけないよ」と語っています。



行衣
個人蔵



頭陀袋
個人蔵



数珠
館蔵



丸伊講の講印の型板
個人蔵



金剛杖とマネキ
個人蔵



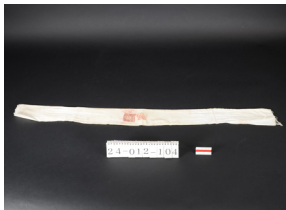
御三幅を入れる木箱と袋
館蔵



宝冠
個人蔵



モモヒキ
個人蔵



ハチマキ
館蔵



脚絆
館蔵



手甲
館蔵



手甲
館蔵

2 齊藤先達と丸伊講

齊藤先達が育った長沢は、江戸時代の長沢村に相当します。長沢には台と入という2地区に丸伊講があり、齊藤先達が率いた丸伊講は「丸伊十七夜講」と名乗りました。その後、入の丸伊講がなくなったことから、丸伊講を名乗るようになります。丸伊講の講員の多くは農家でした。齊藤先達のころには、講員は14～15人いました。

丸伊講は、毎月8日に講元や講員の家に集まる「月拝み」を行ってきました。この時に掛ける3本の掛軸のことを御三幅といいます。中央は木花開耶姫命（富士山の祭神）、右は御身拔（富士講の教えを五行に記したもの）、左は小御嶽石尊大権現（五合目の小御嶽神社の祭神）の掛軸を掛けました。そして講員全員で、富士講の経典である「御伝え」を唱えました。齊藤先達は月拝みについて「みんなにお経を覚えてもらうためにするんですけど、一般には正五九（正月・五月・九月）、この3回なんですけど、それではみんなが経典を覚えてもらえないということで、毎月するようになりました」と語っています。正五九の集まりは講元の家で行い、毎月の月拝みは講員の家を順番に回りました。正五九には、線香を円錐形に積み上げて火をつけ、焚き符と呼ばれる紙を燃やす「お焚上げ」を行いました。講元が亡くなり、齊藤先達が講元と先達を兼務するようになってからは、正五九の集まりとお焚上げは齊藤先達の家で行うようになり、昭和時代まで続けられてきました。



丸伊講の御三幅
館蔵



御三幅
館蔵



角行の御身拔
館蔵



富士講の経典「御伝え」
「富士山烏帽子岩御直伝」
館蔵



丸伊講の積立金の帳面
「富士講金掛合帳」
大正9（1920）年
館蔵



マネキ
御師浅間坊旧蔵
重要有形民俗文化財
館蔵



お身拔を入れる木箱
館蔵

3 齊藤先達と三浦富士

神奈川県南東部にある三浦半島には丸伊講以外にも数多くの富士講があり、その多くが三浦富士を信仰対象としました。三浦富士（標高 183m）は富士山に見立てられ信仰されてきた山で、山頂から富士山を望むこともできます。同じ峰続きで北西に位置する武山とともに漁師が漁場の目印として大切にしてきました。また、山頂に浅間社が勧請され、富士山の神が祀られることから、三浦富士は別名「フジヤマ」「オヤマ」「センゲンヤマ」「センゲンサマ」と称されてきました。漁師の間では、三浦富士のセンゲンサマは、豊漁にさせてくれたり、海難事故を防いでくれるとされてきました。このように三浦富士が深く信仰されてきたこともあり、三浦半島には富士塚がありません。

三浦富士への登山道は長沢口と津久井口の2つあり、山頂にも長沢と津久井それぞれの浅間社の石祠があります。7月8日が三浦富士の山開きで、長沢では山頂祭、津久井では浅間神社奥宮例祭と呼ばれ、長沢と津久井が共同で主催します。7日に長沢の天照大神^{てんしょうだいじん}と津久井の浅間神社でそれぞれ宵宮祭が行われます。8日は三浦富士の山頂でお焚上げが行われます。昔は多くの富士講が参加し、お焚上げは1講1座で、参拝者も山頂に入りきれないほど大勢で賑わいました。昭和60年代以降、お焚上げをする富士講が減少していったため、後年は齊藤先達が1人で6座ほどを行うようになりました。残念ながら現在はお焚上げは行われていません。

4 齊藤先達と富士登拝

丸伊講の富士登拝は、短いときで4年に1回、富士山に登拝し、申年にも登拝しました。登拝のための掛け金は、正五九（正月・5月・9月）の8日の月拝み（月並）の時に集めました。

丸伊講の登拝は8月1日にかけて3泊4日で行いました。出立前に自宅のご神前で朝拝した後、鉄道で横須賀を出発し、まず高尾山に参拝しました。この行程を三山^{さんやま}といい、富士登拝の前に高尾山に登り、帰りに箱根か大山に寄るものでした。高尾山参拝後、上吉田に向かい、御師浅間坊（小佐野家）に1泊し、翌日はご神前で朝拝をした後、5時には出発しました。山小屋は八合目の白雲荘か元祖室で泊まり、翌日は御来光を拝み、オハチ巡りをして下山し、浅間坊に泊まりました。最終日は箱根か大雄山道了尊に寄り、時間があれば大山に参拝し帰りました。齊藤先達は富士登拝について「最初はですね、お馬返しを通過しましたが、講社としては全部で6回上がっているんですけど、その中で2回だけお馬返しから上がった。滝沢林道から1回、後は河口湖口（バス）ですけどね。年齢制限をしなかったから、下は小学生から上は74、5歳までの人を連れて上がりましたから。私は三浦のお天気先達と言われて、講中に傘持っけ、カップ持ってけということはいってなかった。だからそれだけが私としてはいばれるなと思っています」と語っています。そして、齊藤先達は富士登拝を45度成就しています。

5 齊藤先達と御中道

おちゅうどう
御中道は、富士山の中腹を1周する修行で、登拝と並んで富士講が大切にしてきた修行です。齊藤先達は、御中道は3回行ったと語っています。最初の御中道は、先達になった昭和28（1953）年で、17名の講員を連れて初めての御中道をしています。他の2回も富士登拝をした後に御中道をしており、丸伊講にとって富士登拝と御中道は一体のものであったようです。なお、行衣のオユルシからその他にも齊藤先達は2回の御中道を行ったことが分かります。

齊藤先達は御中道について、次のように語っています。

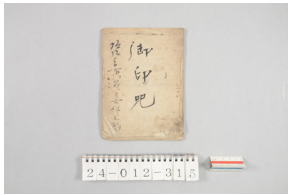
「半中道的なことを私は2回やりました。富士宮六合の後藤室を朝4時に起きて出ました。それで、（大沢崩れ右岸にある大沢室の）中村の朝次郎おやじが、『おい、横須賀なあ、10時前には来いよ、10時過ぎるとな、霧が上がってきてだめだから』と言われたんですが。途中で大沢を渡る手前で、『こっから帰る』っていうのがいましてね、中学生で、帰るっていうから帰らせては困るから、宝冠を解いてつないで、それで背負わして、御中道をしました。先達が大変っていうのは、その間、鳥居のところでお経をあげてなきゃいけないからね、渡すのも多くても10人、そうしないといっぺんにみんな渡ると、石が落ちてきて怪我されては困るから、大体10人で区切って、それでリーダーを付けて、『はい行け』、『はい行け』ってね。そういうふうなことで渡る」。

6 齊藤先達と富士講の教え

齊藤先達は、先達になるために丸伊十七夜講（以下、丸伊講）先達の齊藤靖一氏と三浦の三大先達として知られた富元講先達の西脇嘉平氏のもとで厳しい修行を積み、昭和28（1953）年に丸伊講の先達になります。そして、齊藤靖一氏からは富士講の御伝え（「富士山烏帽子岩御直伝」）を写すことを許され、西脇嘉平氏からは「富士秘法」を口伝され、「九字護身法」を伝授されます。さらに、「富士秘法」を写すことも許されます。

「富士山烏帽子岩御直伝」には、角行以来の富士行者が口伝してきたご真言が記されています。ただ、御師浅間坊から齊藤靖一氏が受領したものであり、齊藤先達が唱える御伝えにはない文句も多く記されています。御伝えの内容を暗記していた齊藤先達は、後に御伝えの内容を講員に覚えてもらうために、手元にある「御伝え」も参照しながら折本に墨で書き写して渡しました。写すときには、水で身を清めて行衣を着用しました。

「富士秘法」には、修験道で大切にされてきた護身のための九字「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前」と印の切り方が記されています。お焚上げでは、必ず九字や印を行います。齊藤先達は九字や印について、「印は自分を守るためのもの、祈祷をするのにもその辺のことを考えなさいよ」「平素の行動がみんなから慕われるような行動をしてなければあまり効力ないですよ。上辺だけでやってではだめですよ」と語って



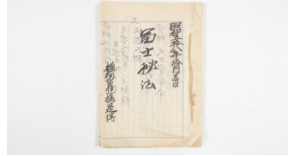
印と九字
「御印呪」
明治 38（1906）年
館蔵



富士秘法と九字護身法
写本：昭和 28（1953）年
原本：文化 12（1815）
館蔵



富士秘法と九字護身法
写本：昭和 28（1953）年
原本：文化 12（1815）
館蔵



富士秘法と九字護身法
写本：昭和 28（1953）年
原本：文化 12（1815）
館蔵



人を探す祈祷
「富士山烏帽子岩御直伝」
館蔵



丸伊講の御伝え
「参水之水」
館蔵

7 齊藤先達と朝拝

齊藤先達の自宅には、床の間にご神前（祭壇）が設えられています。齊藤先達は、毎朝御伝えを唱え、富士山への感謝と1日の安全を祈ります。この朝拝は朝食前の午前6時ころから30分ほど行い、行衣を着てご神前に座り拝みを上げます。

ご神前には中央に御神体の掛軸、左右に旗が掲げられ、上に門帳が掛けられています。掛軸のうち中央の御身拔（富士講の御真言が記されたもの）は、齊藤先達が丸伊講の講員から譲り受けた御三幅の1本で、食行身禄の入定を見届けた御師中鷹丸豊宗の3世の手によるものです。右の「天照皇大神」は、齊藤先達が42歳の厄年に伊勢神宮へ参拝した時に授与されたものです。左の「天拝式教伝之図」は齊藤先達が定宿とした御師筒屋に伝わる版木を用いて齊藤先達が刷ったものです。角行に始まる歴代の富士行者の肖像と系譜が描かれています。旗と門帳は神道扶桑教から授与されたもので、旗には神道扶桑教の御真言、門帳には神道扶桑教の御神紋の桜が入っています。

下の供物台には複数の三方が置かれ、中央の三方に水と御神酒が供えられ、奥の三方に長沢や富士吉田の神社などで授与された神札や御守が祀られています。手前の台には灯明用の蠟燭立てと鈴・数珠・火打石・火打金が置かれています。右手には大幣（祓い串）、左手には御幣があります。

展示は、平成 24（2012）年 6 月 24 日の朝拝を元に再現したものです。



齊藤先達のご神前



お焚上げの火鉢
館蔵

8 齊藤先達と神道扶桑教

齊藤先達は、師である丸伊十七夜講先達の齊藤靖一氏が神道扶桑教の中教正（昭和 40 年〔1965〕の階位）であったこともあり、丸伊十七夜講の先達になった 2 年後の昭和 30（1955）年には、神道扶桑教から訓導を拝命しています。

神道扶桑教は、明治 6（1873）年に^{ししのなかば}穴野半氏が結成した神道教団です。当時、御師や富士講であっても、明治新政府から教導職を拝命しているか、明治新政府が認める宗教団体に所属していなければ、活動するのが難しい状況でした。その中で、受け皿となる教団として穴野氏が結成したのが神道扶桑教でした。神道扶桑教には、春季報元大祭（春分の日）、御神火大祭（6 月 3 日）、秋季報元大祭（秋分の日）という 3 つの大祭と毎月の月並祭があり、齊藤先達は欠かさず参列してきました。また、神道扶桑教の御神体である^{みかんざね}「御神實」を富士山八合目の天拝宮への遷御する奉安や下山（奉迎）にも参列しており、行衣にそのオユルシが縫い付けられています。オユルシの中に「大行火渡執行」（昭和 33〔1958〕年）とあり、この時のものと推定される写真には、大勢の富士講の人々がおり、齊藤先達の姿もあります。また、昭和 38（1963）年と昭和 55（1980）年には、富士山から下山した御神實をお迎えし、三浦富士の山頂で祭礼を行った後、自宅に奉安し、毎日講員の家を巡って回りました。齊藤先達は、神事師範として後継の育成にも尽力し、平成 17（2005）年、最高位である大教正を拝命しています。



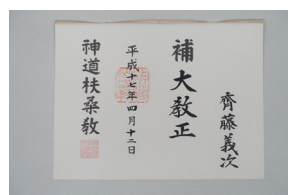
神道扶桑教の教典
「富士山烏帽子岩直伝」
明治 11（1878）年
館蔵



神道扶桑教の教典
「神徳経」
明治 11（1878）年
館蔵



神道扶桑教から表彰状・階位証
「神事師範補任状」
平成 13（2001）年
館蔵



神道扶桑教から表彰状・階位証
「大教正補任状」
平成 17（2005）年
館蔵



神道扶桑教から表彰状・階位証
「満三十年勤続表彰状」
昭和 60（1985）年
館蔵



神道扶桑教から表彰状・階位証
「富士神法斎火大祈祷三十三度奉修感謝状」
平成 13（2001）年

9 齊藤先達と長沢①

齊藤先達は、師である齊藤靖一先達の「みんなから慕われるような先達にならなくてはいけないよ」という言葉を胸に刻み、昭和 27（1952）年に国立療養所久里浜病院（現、久里浜医療センター）に就職し、清掃を行う労務職を 30 年、アルコール患者の更生施設の指導員を 9 年、定年まで勤めました。その後も嘱託職員として 7 年間ほど週に数日勤務しました。また、労働組合も 30 年務め、職員のために設置した保育園（託児所）の副園長も務めました。

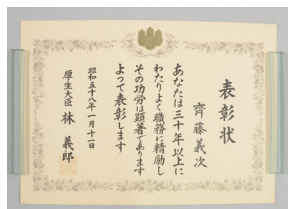
齊藤先達は仕事について次のように語っています。

「みんなが一番嫌うべき清掃、いわゆるゴミ取りを 30 年しました。そして、今度は『齊藤くん、悪いけど、アルコールの患者さんを見てくんねえか。作業の手伝いをしてくれないか』ということで、配属替えになりました。それでアルコールの患者さんと 9 年過ごさせて、定年までいました。まあ、そういうようなことで、みんなから慕われていました。また、労働組合にも入りまして、労働組合の国立久里浜病院の支部長を約 30 年しました。それで、神奈川に国立病院が 8 つありまして、その中の長を 10 年やってみました。本当にその意味では、皆さんのためになるようなことをしてきたと私は今思っています」

また、家では田んぼと畑をし、春になると夕方にキャベツを収穫して箱詰めし、朝出荷しました。地域では農協の生産班長、消防団員、町内会長（8 年間）を務めました。



職場・農協・神社の表彰状
「表彰状（永年医療業務従事）」
昭和 42（1967）年
館蔵



職場・農協・神社の表彰状
「表彰状（三十年職務精励）」
昭和 58（1983）年
館蔵



職場・農協・神社の表彰状
「感謝状（生産班長尽力）」
昭和 61（1986）年
館蔵



職場・農協・神社の表彰状
「感謝状（天照大神内陣門帳奉納）」
平成 6（1995）年
館蔵

9 齊藤先達と長沢②

齊藤先達は、長沢の様々な祭礼の斎主を務め、神事を執り行ってきました。長沢の氏神である天照大神^{てんしょうだいじん}は、久里浜の天神社宮司が兼務していたこともあり、年末年始と七五三の祝詞奏上や夏祭り（7月）で町内を渡御する神輿の祓いを行いました。また、元旦には三浦富士に登り、山頂でお焚上げを行いました。齊藤先達は丸伊講の印を捺した干支の絵馬を数百枚用意しておき、お焚上げの火で清めてから参拝者に配り、最後に一緒に初日の出を拝みました。

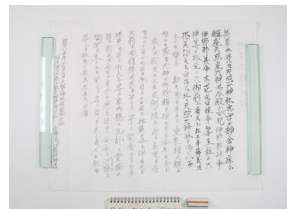
1月上旬には長沢の長岡町内の海岸で、古いお札や正月の松飾、縁起ものを燃やし無病息災を願う「オンベ焼き」が行われます。齊藤先達は行衣姿でオンベの前で拝みを上げ、火打石と火打金で蠟燭に火を灯し、これをオンベ焼きの元火にしました。また、三浦富士のお焚上げで清めた絵馬を参拝者に渡しました。

地域の人に頼まれて、地祭り^{じまつり}（地鎮祭）・建築物や神輿の竣工祭・初午の祈祷・屋敷神の移転・神棚の交換などの祈祷も行いました。平日の吉日に頼まれることも多いため、通勤で使っていた自転車に装束を入れた箱を載せておき、職場の昼休みや時間休を利用して祈祷に向かいました。

また、齊藤先達は富士講だけでなく、イナリコ（稲荷講）・お念仏講^{じじん}・地神講の講員でもあったため、輪番ではありましたが、ほぼ毎月自宅で講の集まりがあり、妻が食事を用意しました。



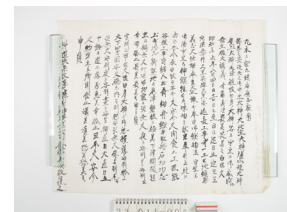
元旦祭と七五三の祝詞
「祝詞（元旦祭）」
昭和 46（1971）年
館蔵



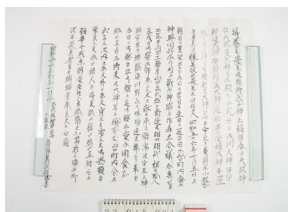
元旦祭と七五三の祝詞
「祝詞（七五三）」
昭和 60（1985）年
館蔵



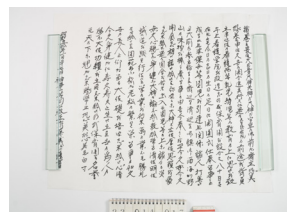
正月に配る絵馬
館蔵



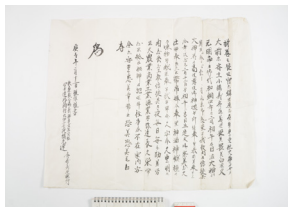
地鎮祭と竣工奉告祭の祝詞
「祝詞（京浜急行久里浜線地鎮祭）」
昭和 39（1964）年
館蔵



地鎮祭と竣工奉告祭の祝詞
「祝詞（神輿竣工奉告祭）」
昭和 56（1981）年
館蔵



竣工祭と初午祭の祝詞
「祝詞（のび保育園開園奉告祭）」
昭和 50（1975）年
館蔵



竣工祭と初午祭の祝詞
「祝詞（初午祭）」
昭和 35（1960）年
館蔵

10 齊藤先達と富士吉田

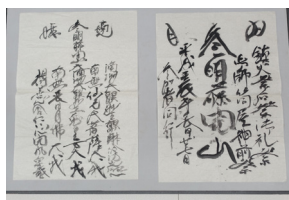
齊藤先達は、丸伊講の先達として長年にわたって富士吉田から富士山に登り続けてきました。それだけでなく、富士吉田の祭礼にも毎年参列してきました。主な祭礼は、北口本宮富士浅間神社の恵毘壽社祭（1月20日）、初申祭（5月5日）、開山前夜祭（6月30日）、開山祭（7月1日）、吉田の火祭（8月26、27日）、恵毘壽社祭（10月20日）、小御嶽神社の開山祭（7月1日）、神道扶桑教の御神火大祭（6月3日）、富士山北口御師団の吉田胎内祭（4月29日）、大塚丘お境祭（7月1日）、一合目鈴原社の開山奉告祭（7月1日）です。

このうち、吉田胎内祭で執り行うお焚上げについては、齊藤先達の強い願いにより、富士山北口御師団と相談する中で、平成14（2002）年に初めて実現したものでした。また、平成10（1998）年には大塚丘お境祭でお焚上げを執り行い、これ以降毎年行っています。このように齊藤先達は、富士講の祭事である拝みを上げ、お焚上げを行うことを通じて、富士講文化を富士吉田に伝えていくことに尽力し、その労を惜しむことがありませんでした。

そして、平成20（2008）年～平成24（2012）年に3回にわたって行われた富士山の世界文化遺産登録に向けた海外の専門家による調査でもお焚上げを執り行い、平成25（2013）年の世界文化遺産富士山の誕生に多大な貢献をしました。これらの功績により平成27（2015）年に本市から表彰されます。



吉田胎内の塩加持の祈祷塩
平成13（2001）年
個人蔵



お焚上げの焚き符
平成24（2012）年
館蔵



世界遺産登録記念のうちわ
平成25（2013）年
個人蔵



お焚上げを紹介する記事
『広報ふじよしだ』6月郷
平成27（2015）年
館蔵



富士吉田市からの感謝状
「感謝状」
平成26（2014）年
館蔵



松尾先達編集の御伝え
御伝え
館蔵

11 齊藤先達の願いを継ぐ

齊藤先達は、富士山の世界文化遺産登録に向けた調査で、20歳の時に開放性骨折を負った左足に大きな負担をかけたため、慢性骨髓炎となり、晩年はその治療に苦しみます。このように古傷を悪化させながらも願っていたのは、富士山信仰と富士講の文化を次代へ伝えることでした。そして、その思いを共にし、一緒に活動をしてきた多くの方々がいました。

神道扶桑教佐世保教会の松尾恵子先達は、平成13（2001）年ころから齊藤先達の下で修行を積み、富士登拝や大澤崩れまでの御中道を行い、富士吉田や三浦富士でお焚上げを執り行っています。しかし、体調が悪化し、平成28（2016）年に逝去されます。姉の西村裕子氏は、齊藤先達と妹の松尾先達を支えていくために、友人の加藤公子氏と常に行動を共にしてきました。そして、齊藤先達を支えてもらいたいという松尾先達の遺志を継いで先達となり、脇先達の加藤公子氏と共に齊藤先達の支えとなっていきます。その後、齊藤先達が富士吉田に来ることが難しくなってからも、その願いを継ぎ、富士吉田の祭礼に参列し、拝みを上げ、お焚上げを執り行っています。また、齊藤先達が富士登拝や富士吉田の祭礼に参列するときに定宿としてきた御師筒屋も、齊藤先達の活動を長年にわたって支えてきました。こうした富士講と御師の文化が次代へと受継がれていくことが、齊藤先達の願いであり、多くの方々がその願いを胸に刻み、活動を続けています。

白装束について

齊藤先達は、富士登拝や富士吉田や三浦富士の祭礼には、頭には宝冠を巻き、腹掛の上に行衣を着用し、モモヒキをはき、手甲、脚絆をつけ、地下足袋を履きました。そして、首に数珠をかけ、腰に鈴を下げ、ずたぶくろ頭陀袋を持ちました。

齊藤先達は白装束について、「これは、いわゆる死装束なんです。死んでいくときに着ていく格好ですよ。だから山に登る時は、死ぬ覚悟で登っていきなさいよということ。それで、みんな白装束。いかにしてみんなと一緒に修行ができるか、そういうことが一番肝心じゃないかなと思います」と述べています。富士講では、亡くなると行衣をお棺に納めて茶毘だびに付すとされ、齊藤先達の葬儀も行衣と腹掛がお棺に納められました。

富士講の役職 【先達・脇先達・講元・世話人】

富士講は、富士山を信仰し登拝をする団体のことです。その組織は次の役職から構成されます。

先達：富士山で修行を積んだ行者で、富士講の信仰面のリーダーです。また、登拝の際には、講員を山頂まで先導します。

脇先達（副先達）：先達をサポートします。お焚上げの時には先達の左右に座り、先達の補助をします。

講元：講の代表。土地の有力者が務め、講屋と呼ばれます。正五九（正月・五月・九月）の集まりや登拝後のダブルマイ（共同飲食）は講元の家でした。

三浦富士周辺の地図

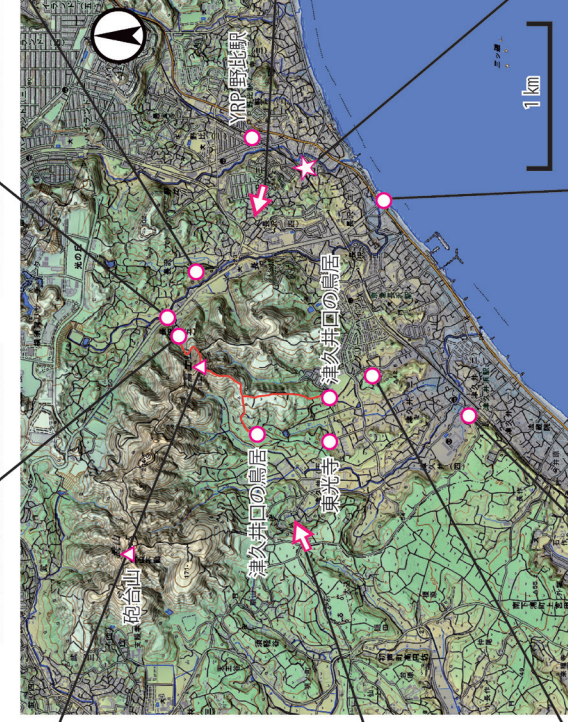
①三浦富士の山頂



②長沢口の若宮神社



③長沢口の浅間神社の石碑



①三浦富士山頂から望む富士山



⑩三浦富士を望む



④天照大神



⑤三浦富士を望む (現在)



⑤三浦富士を望む (昭和30年代)



⑨荘厳寺 (齊藤先達の菩提寺)



⑧津久井浅間神社



⑦北下浦海岸のオンベ



⑥齊藤先達宅裏手からの眺望



年表

昭和五（一九三〇）年	〇歳	十二月四日、神奈川県横浜須賀市長沢で父次郎吉、母ヨシの三男三女の長男として生まれる 父は丸伊十七夜講（以下、丸伊講）の脇先達を務めた
昭和十二（一九三七）年	七歳	北下浦尋常高等小学校入学
昭和二十二（一九四七）年	十七歳	初めて富士山に登る
昭和二十三（一九四八）年	十八歳	五月二日、青年団対抗陸上競技大会の一万m走で一等となる ※昭和二十一～二十三年まで毎年出場した。
昭和二十五（一九五〇）年	二十歳	二月二日に山仕事で重傷（開放性骨折・骨髓炎）を負い、十二月四日まで入院する ※晩年、後遺症の慢性骨髓炎で苦しむ 丸伊十七夜講の四代目先達の齊藤靖一氏に「先達を継げば助けてやる」と言われ、富士講に入る 齊藤靖一氏は両親の仲人であり、義次氏の名付け親
昭和二十五～二十八年		齊藤靖一氏の元で二年間修業を積み、三年目に津久井の富元講先達の西脇嘉平氏のところへ修行に通い、「富士秘法」を口伝され、「九字護身法」の伝授を許される ※西脇嘉平氏所持の「富士秘法」を昭和二十八年九月二十九日拝書、齊藤靖一氏所持の「富士山烏帽子岩御直傳」を昭和二十八年十月十三日拝書
昭和二十六（一九五一）年	二十一歳	三浦富士山開きのお焚上げを齊藤米吉先達と行う
昭和二十七（一九五二）年	二十二歳	国立療養所久里浜病院に就職し、清掃などを行う労務職を三年、アルコール患者の更生施設の指導員を九年勤める 全日本国立医療労働組合にも三十二年務め、久里浜支部長ほか、地区議長、医労連副議長などを歴任する
昭和二十八（一九五三）年	二十三歳	丸伊講の六代目先達になる 七月二十九日に丸伊講の講元菱沼進吉（母の弟）他十七名と御中道を行う。※丸伊講の富士登山は短いときで4年間隔
昭和二十九（一九五四）年	二十四歳	北口本宮富士浅間神社大鳥居造営（建替え）に奉納する
昭和三十（一九五五）年	二十五歳	扶桑教の訓導を拝命する 齊藤靖一先達（行名：靖山藤行）の登山四十四度大願成就の記念碑を三浦富士に建立する 「不動経書」・「御真言」拝書
昭和三十一年（一九五六）年	二十六歳	七月二十九日ころに丸伊講で高尾山参詣、富士登山を行う 七月に御中道を行う（オユルシ） ※同年は丙申年であり、申年の登山も大切にされてきた
昭和三十二（一九五七）年	二十七歳	七月一日、市内上吉田の金鳥居竣工 丸伊講が定宿とした御師浅間坊の小佐野茂氏が金鳥居再建委員会副委員長を務め、齊藤先達は寄付金集めに奔走するなど尽力する 昭和三十一年、三十三年の九月の秋分の日に斎行された神道扶桑教の秋季大祭の時に、富士講が五〇ほど新宿駅前に八時に集合し、マネキを掲げて掛念仏を唱えながら、世田谷区にある神道扶桑教の太祠まで甲州街道を練り歩き、齊藤先達も参列 ※七、八月に元祖室の天拝宮に納められた神道扶桑教の御神寶（元祖角行の御神鏡）を富士山から下ろし太祠に戻る時に、富

		十講一同で迎えた
昭和三十三年（一九五八）年	二十八歳	喜美江氏と結婚、昭和三十五年に司氏、昭和三十七年に達氏、昭和四十三年に学氏が誕生
		二月二十五日 多数の富士講が参加した火渡修行を行う（オコルシ）
昭和三十五年（一九六〇）年	三十歳	御中道を行う（オコルシ） この頃から近隣の依頼を受け、齋主として地鎮祭等を執り行うようになる
昭和三十六（一九六一）年	三十一歳	御中道を行う（オコルシ）
昭和三十八（一九六三）年	三十三歳	富士山から下るされた御神寶を迎え、三浦富士の頂上に持ち上げ、祭事を行う 十一月一日 京浜急行電鉄の野比駅（現、Y R P 野比駅）開業
昭和三十一年（一九六四）年	三十四歳	富士山五合目まで有料道路「富士スバルライン」が開通
昭和四十（一九六五）年	三十五歳	この頃から、職場の看護婦を富士登山へ連れて行くようになる 久里浜病院附属看護学校の学生も富士登山に連れて行った 扶桑教外八海巡拝団に参加する
昭和四十一（一九六六）年	三十六歳	七月二十五日 講元菱沼進省他一九名と富士登山と御中道を行う（オコルシ）
昭和四十二（一九六七）年	三十七歳	神道扶桑教より扶桑教立教八十周年記念事業奉賛会における本部御神殿造営に貢献したことの感謝状を拝受する 国立療養所久里浜病院から永年医療業務に従事したことを表彰される
昭和四十七（一九七二）年	四十二歳	神道扶桑教より富士山天拝所造営奉賛会における天拝所御神殿造営に貢献したことの感謝状を拝受する
昭和四十八（一九七三）年	四十三歳	神道扶桑教より神事二等拝命
昭和五十三（一九七八）年	四十八歳	扶桑教より開山御神火大祭執行に協力したことを表彰される
昭和五十五（一九八〇）年	五十歳	丸伊講で庚申縁年の富士登山をする（オコルシ） 富士山から下るされた御神寶を迎え、三浦富士の頂上に持ち上げ、祭事を行う
昭和五十七（一九八二）年	五十二歳	神道扶桑教より扶桑教立教百周年記念事業奉賛会に貢献したことの感謝状を拝受する
昭和五十八（一九八三）年	五十三歳	厚生大臣より三十年以上職務に精励したことを表彰される
昭和六十（一九八五）年	五十五歳	丸伊講としての富士登山はこの頃からなくなる。 神道扶桑教の教師を三〇年勤続したことを表彰される
昭和六十一（一九八六）年	五十六歳	扶桑教神事課長拝命 権中教正拝命
平成元（一九八九）年	五十九歳	扶桑教神事部長代行拝命
平成三（一九九一）年	六十一歳	国立療養所久里浜病院を退職、これ以降七年間嘱託として勤務 定宿としていた御師浅間坊当主の小佐野陽代氏が亡くなる 数年前から浅間坊が休業したため、定宿を御師簡屋とする この頃から丸金講の岩岡先達と行動を共にするようになる 中教正拝命
平成四（一九九二）年	六十二歳	神道扶桑教より御開祖生誕四百五十年の記念事業完遂に貢献し

		たことにより感謝状を拝受する
平成六（一九九四）年	六十四歳	権大教正拝命 横須賀市長沢の天照大神に内陣門帳を奉納したことにより感謝状を拝受する
平成十（一九九八）年	六十八歳	七月一日の大塚丘お境祭にてお焚上げを執り行う。この頃から同祭にてお焚上げを執り行うようになる。
平成十二（二〇〇一）年	七十一歳	この頃から、神道扶桑教佐世保教会の松尾恵子氏に教えを請われ、共に登山・御中道（小御嶽神社・大澤崩れ）・お焚上げを行うようになる 姉の西村裕子氏と友人の加藤公子氏も齊藤先達と松尾先達を支援していくために常に参加するようになる 神道扶桑教より神事師範・神事部長拝命 神道扶桑教より間山御神火大祭の第一回齋火神事から連続三十三度奉修したことの感謝状を拝受する 齊藤先達が吉田胎内でお焚上げを行うことを相談し、御師横田但人氏の結婚奉告祭として吉田胎内でお焚上げを執り行う
平成十四（二〇〇二）年	七十三歳	齊藤先達の強い願いにより、四月二十九日の胎内祭においてお焚上げを執り行い、これ以降毎年執り行うようになる
平成十六（二〇〇四）年	七十四歳	富士山八合目烏帽子岩の富士山天拝宮竣工祭に参列
平成十八（二〇〇六）年	七十六歳	神道扶桑教より教規を遵守し宣布に努め後進を指導し範を示したことにより、功労記章を拝受する
平成十九（二〇〇七）年	七十七歳	この頃に最後の富士登拝を行う
平成二十（二〇〇八）年	七十八歳	「富士山世界文化遺産国際シンポジウム・意見交換会」でお焚上げを行う
平成二十一（二〇〇九）年	七十九歳	「富士山世界文化遺産国際専門家会議・国際フォーラム」でお焚上げを行う 二月二十一日 めぐろ歴史資料館のめぐろ・れきし講座「富士講先達に聞く富士登山と習俗」で横山昭一学芸員と講演
平成二十四（二〇一二）年	八十二歳	「イコモス調査員による富士山現地調査」でお焚上げを行う 高尾山薬王院で執り行われた災害被災地復興祈願三社社合同法要に参列
平成二十五（二〇一三）年	八十三歳	富士山が世界文化遺産に登録される
平成二十六（二〇一四）年	八十四歳	富士吉田市制施行六十四周年記念式典でお焚上げを市内の各祭事で執り行うなど、多くの人々が富士講文化に触れる機会をつくるとともに、富士山の世界文化遺産登録に際して、イコモス関係者のみならず国内外の多くの人々へその信仰面の価値を伝えることに多大な貢献をした功績により表彰される
平成二十七（二〇一五）年	八十五	西村裕子氏、加藤公子氏、石川隆氏、加藤信子氏と共に内八海修行を行う 十一月二十二日 ふじさんミュージアム講演会「富士講先達に聞く富士山信仰」で佐藤照美氏と講演 十二月四日 神道扶桑教より長老の称号を拝受する
平成二十八（二〇一六）年	八十六歳	松尾恵子氏逝去。恵子氏と共に富士講の行事に参加してきた姉

の西村裕子氏とその遺志を継ぎ先達となり、脇先達の加藤公子氏と共に齊藤先達の支えとなり、その教えを受継いでいく。
西村裕子氏、加藤公子氏、石川隆氏、加藤信子氏と共に外八海修行を行う

令和二（二〇二〇）年 九十歳 新型コロナウイルス感染症による緊急事態宣言が全国で出るなか、吉田胎内祭が執り行われ、齊藤先達が、西村裕子氏、加藤公子氏、原田武彦氏、渡辺寛氏とお焚上げを執り行う
これ以降、令和四（二〇二二）年まで毎年お焚上げを行う

令和六年（二〇二四）年 九十四歳 三月七日、齊藤義次先達逝去

参考文献

神奈川県教育庁社会教育部文化財保護課 1974『神奈川県民俗シリーズ 11 神奈川の富士講』
佐藤照美 2012「三浦富士に集う人々」『新横須賀市史 別編 民俗』
富士山信仰用具調査委員会 2021『富士吉田市文化財調査報告書第 11 集 富士吉田の富士山信仰用具調査報告書』
堀内真 2012「富士信仰の民俗」『富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書』
堀内真 2016「御中道と御中道巡り」『富士山 山梨県富士山総合学術調査研究報告書』2 一本文編一
山梨県立富士山世界遺産センター 2017「特集 御中道調査報告」『山梨県立富士山世界遺産センター研究紀要 世界遺産富士山』1

資料提供者

企画展開催にあたって齊藤先達のご家族や多くの方々に多大なご協力をいただきました。
厚く御礼申し上げます。

齊藤喜美江 齊藤 達 齊藤 学 齊藤浩子 佐藤照美
飯島栄子 加藤公子 加藤信子 小澤恵美子 小澤輝展 穴野史生
西村裕子 横田但人

神道扶桑教

大先達

企画展題字：神道扶桑教管長 穴野史生氏揮毫

富士

義次

齊藤義次先達 最後の書